博士学位論文

（要約）

エルネスト・ラクラウの政治思想

―― 敵対性・不審者・デモクラシー――

名古屋大学大学院

国際言語文化研究科

山本 圭

平成 25 年 5 月

博士論文要約

本論文「エルネスト・ラクラウの政治思想—敵対性・不審者・デモクラシー」は、エルネスト・ラクラウの政治思想の全体像を明らかにし、さらに既存の民主主意論の限界を指摘することで、筆者が「不審者のデモクラシー」と呼ぶ民主主義の新しい展望を提示するものである。

よく知られているように、現代の民主主義理論においては、「熟議民主主義」という潮流が国内外において支配的である。それは理論的にはハーバーマスやロールズなどの哲学に依拠しながら、民主主義の本質を合理主義的な対話、ないし討論を通じてコンセンサスを形成することに求める理論をさす。熟議民主主義は多くの人々に研究され、その影響力は理論にとどまらず、現実政治においても省みられるほど大きなものとなっている。

この熟議民主主義に対しては、たとえば政治理論家シャンタル・ムフによる批判が有名である。それによると、熟議民主主義者はコンセンサスや合意を強調するばかりで、政治における「敵対性」の次元を見ていない、そのかぎりで彼らは政治の次元を見落としている、というものである。熟議民主主義批判を通じてムフが提示したのが、「闘技民主主義」であり、これは合意ではなく対立、そして不一致を通じた多数性こそ民主主義的とする考え方であった。とはいえムフはここで剥き出しの敵対ではなく、飽くまで対等な対抗者のあいだでの対立と考えており、そのかぎりでリベラル・デモクラシーの枠組みを尊重しながら、その内部で対立を可能にする理論であったといえる。

1990 年代〜2000 年代の政治哲学における民主主義論は、以上の熟議が闘技か、合意か対立か、という二項対立に大きく規定されていた。筆者が問題視したのは、いずれの理論もそれがリベラル・デモクラシーという枠組みを前提にしている点で相似しているということであった。いかにしてこの二項対立から抜け出るか、いかにしてリベラル・デモクラシーから抜け落ちたものを民主主義理論は思考できるだろうか、このような問いを考えるために、筆者はエルネスト・ラクラウの政治思想をその対抗軸として設定したのである。

エルネスト・ラクラウはしばしば「ポスト・マルクス主義」、ないし「ラディカル・デモクラシー」の旗手として知られており、特に 1985 年に出版されたシャンタル・ムフとの共著『ヘゲモニーと社会主義戦略 *Hegemony and Socialist Strategy*』は彼の名を一躍有名にした。にもかかわらず、日本においては、ムフの理論は積極的に紹介されてきたものの、一方ラクラウの方は著作の翻訳も含めて言及されることが少ないのが現状である。そこでラクラウの理論から、闘技民主主義とは異なるラディカル・デモクラシーの展開が見られるのではないか、そしてそれこそ熟議/闘技という現代民主主義理論を規定する枠組み、も

しくはリベラル・デモクラシーの枠組みを相対化し、新しい地平を拓きうるのではないか、これが本研究を開始するにいたる問題意識であった。

また本論文がラクラウの政治理論に焦点をあてるのは、それが現代民主主義理論に大きく貢献しうるということばかりでなく、それがデモクラシーの理解を同質性への欲望から引き離すからでもある。そもそも民主主義が統治するものとされるものの一致いう「同質性」の欲望を強く持つものであるとすれば、カール・シュミットがはっきり述べているように、このような同質性は異質なものを同化するか、もしくは排除することを通じて達成される。しかしながらこれは民主主義の危うい側面を孕んでいる。というのも、それは容易に同化しえないものやマジョリティにはそぐわないものを排除するからである。一方ラクラウの政治思想は、多様性を担保するということのみならず、異なるものに開かれたデモクラシーの可能性を提示する。本論文はここに同質性ではなく異質性からデモクラシーを考える手掛かりを求めた。この異質性こそ、今日かつてない仕方で同質性を浸食しているにもかかわらず、これまでのデモクラシー論が見落としてきたものなのである

ラクラウの政治理論は、ヘゲモニー実践を通じて社会空間が閉じられようとする必然性と同時に、そのような閉合が最終的にはかならず失敗するという冷徹な眼差しを提示している。別言すれば、同質性は異質なものを消去しようとするが、そのプロセスが完遂されることはなく、ラクラウがデモクラシーを認めるのはまさにこの同一化の「不完全性」においてなのである。ラクラウの政治理論の分析から本論文が導きだすのは、排除の糾弾と包摂の必要性という、ありふれた「道徳的な」主張ではなく、むしろ包摂が不完全である、ないし排除が必然的であることのうえに成立するデモクラシーの在り方にほかならない。

以上の諸理由から、本論文の目的は二つに大別される。第一の目的は、ラクラウの政治理論の全体像を提示することである。ラクラウの研究はこれまで少なくない論者によって研究されてきたが、これらはラクラウの政治思想のある部分、たとえば「言説理論」、「マルクス主義との関連」「ラディカル・デモクラシーデモクラシー論」など、一部をフォーカスするものがほとんどであった。したがってラクラウの政治思想を全体において提示する作業が必須であると考える。

そのさい本研究では、ラクラウのポスト・マルクス主義を二つの軸から焦点化した。それらは「ポスト基礎付け主義 post-foundationalism」と「ラディカルな唯物論 radical materialism」である。ここで重要なことは、これら二つの中心的モメントが互いに相反するベクトルを指示していることです。すなわち、「ポスト基礎付け主義」が、ヘゲモニー実践を通じて（不完全ながらも）社会空間を閉じようとする構えに対応しているとすれば、一方「ラディカルな唯物論」は、そのような閉合が最終的に失敗するという認識に対応している。ラクラウの政治理論は、これらの「開」と「閉」という二つのベクトルが引き合

う緊張の場に位置取るのであり、そのため社会空間を完全に閉じようとすることはおろか、それをただただ他者に向けて開け、戯れればよいとする、いわゆる「ポストモダン」の諸理論とは区別されねばならないことが明らかになるだろう。

本論文の第二の目的は、ラクラウのポスト・マルクス主義についての議論から、そのデモクラシー論を引き出すことである。本論で詳述するように、ラクラウのデモクラシー論はそのポピュリズム論においてひとつの到達点を示している。70 年代のペロニズム分析から近年に到るまでのあいだ、ラクラウが直接ポピュリズムに言及することがほとんどなかったために、しばしば彼の政治理論はポピュリズム論に回帰したと看做されている。しかし本論文の理解では、たとえ「ポピュリズム」そのものの名が口にされずとも、ラクラウの政治的思考にとってポピュリズムはつねに参照点であったのであり、それこそが彼が「政治的なもの」と考えるモノを端的に表現しているのだ。

本論文が試みたいことは、このラクラウのポピュリズム論を「不審者のデモクラシー prowler's democracy」として展開することである。たとえば広辞苑第六版において「不審」とは、「つまびらかでないこと。確かにはわからないこと。うたがわしいこと。不安に思うこと」などが主要な意味として挙げられており、それゆえ「不審者」もまた、つまびらかでない、うたがわしい人物であると同時に、不安を感じる者であると言えるだろう。このことを本論文の言葉で言い換えるならば、不審者とは「ある社会を構成している支配的な言説に適切に位置づけられていない、そのため意味を十分に固定していない/不十分に意味付けされているアイデンティティ」ということができる。それは排除された、もしくは包摂を拒むようなアウトサイダーではなく、われわれのすぐかたわらで佇む不気味な隣人なのだ。本論文の中心的な議論のひとつは、現代民主主義理論が、今日増殖しつつあるこのような政治的アイデンティティを捉え損なっているということ、ラクラウの政治理論がそれを踏まえた仕方でデモクラシーを語る可能性を有しているということにほかならない。言うまでもなくこの試みは、ラクラウの問題意識から「直接」導かれるものではなく、彼の想定した射程をはるかに越えた応用である。しかしそれにもかかわらず、それは間違いなくラクラウの理論的視座から引き出されるべきラディカルな帰結なのであり、「ラディカル・デモクラシー」が今日的な問題状況において喫緊の重要性を持つことを示すのは、このような方法において他にないと信じる。

本論文の構成は次の通りである。先に述べた二つの目的に対応する仕方で、本論文は二部構成をとっている。第一部「エルネスト・ラウラウのポスト・マルクス主義」においては、本論文の第一の目的であるラクラウの政治理論の全面的な検討を試みる。第一章「ポスト・マルクス主義の方法論」では、ラクラウが打ち出したポスト・マルクス主義の方法

論を取り上げる。またポスト・マルクス主義の方法論である「言説理論」を検討し、それに対する批判をも分析する。本章では、これらの批判に対する応答から、ポスト・マルクス主義の中心的な柱として「ポスト基礎付け主義」と「ラディカルな唯物論」があることを明らかにする。

第二章「政治と普遍的なるものの行方」では、ラクラウのポスト・マルクス主義を支える特徴のうち、「ポスト基礎付け主義」に対応するものとして、「普遍性」の問題を取り上げる。今日、差異と多元主義の旗印をもとに、個別主義的なアイデンティティが跋扈するなか、普遍主義という観念はしばしば全体主義的なイデオロギーに堕するものとして忌避される傾向にあった。一方ラクラウは、政治を復権させるために普遍性の概念を再構築しようとするのであり、本章は、従来のそれとは異なった仕方で、今日いかなる普遍性の概念が可能であるかについての検討をおこなう。

第三章「敵対性と異質性」は、ポスト・マルクス主義の第二の特徴である「ラディカルな唯物論」に対応している。本章は「敵対性」概念の分析から始める。敵対性はラクラウの政治理論において一貫して重要な比重が与えられているものであるが、それをよくよく分析するとその提示の仕方が一様ではないことが明らかになる。本章ではこの敵対性概念の変遷を追跡し、さらにはそれが「異質性」という概念に交差する過程を検討する。こうして第一部では、ラクラウのポスト・マルクス主義の全体像が明らかにされる。

第二部「不審者のデモクラシー」では、ラクラウのラディカル・デモクラシー論が対象となる。第四章「現代民主主義におけるアゴニズムの隘路」では、そのための予備作業として、現代民主主義理論、なかでもラクラウのデモクラシー論としばしば混同されている闘技民主主義を取り上げる。闘技民主主義の代表的理論を分析することで、その理論的潮流内部での共通点と差異が浮かび上がるが、それと同時にこれらが抱える限界もまた明らかになる。本章では、闘技的民主主義が熟議民主主義へのオルタナティブを提示したものではなく、むしろその一側面を強調した別ヴァージョン、あるいは必然的な裏返しにすぎないことを示す。

第五章「不審者のモンタージュ」では、本論文が「不審者」と呼ぶ新しい政治的アイデンティティを議論する。まずマルクスの古典的著作『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』を手掛かりに、社会から排除されたものが、いかにして同質的な空間に介入する政治勢力になりうるのかを検討する。しかし、しばしば「後期近代」とも呼ばれる時代にあっては、異質性は単に外部のそれではない。本章では続いて、「アンダークラス論」や「社会的排除論」の分析を経由しながら、包摂/排除の語りが前提とするような外部/内部のメタファーが十分に機能していない現代のアイデンティティ状況を提示したい。ここから明らかになるのは、異質性は外部に放擲されたそれではありえず、むしろアイデンティティの不

安定性や欠如として内部そのものにあるということである。この不安で不安定なアイデンティティを生きることを強いられている「われわれ」こそ、本論文が「不審者」と呼ぶものであり、ラディカル・デモクラシーはまさに、そのようなアイデンティティこそを政治的主体として捉える必要があることを提示する。

このような状況を踏まえ、第六章「不審者のデモクラシー――新しい動員にむけて」では、ラクラウのデモクラシー論を、より広範な人々の動員を可能にする理論として錬磨する。本章ではラクラウのポピュリズム論を検討する。もとよりポピュリズムは、デモクラシーと相性が悪いと考えられがちであるが、ラクラウは逆に、ポピュリズムこそラディカル・デモクラシーに不可欠であると考える。つまりラクラウにとってポピュリズムとは、同質性から排除された異質なものから「人民」なる集合的アイデンティティを構築することにほかならない。ラクラウの政治理論の新奇さは、同質性から排除されてきた異質性から導かれるはずであり、この外部へのまなざしから今日の主流を為す民主主義論との差異も銘記される。さらに本章では、ラクラウのポピュリズム論をより洗練させるかたちで本論文が「不審者のデモクラシー」と呼ぶものを明らかにする。それは内部そのものにある欠如から同一化の機制を通じた仕方で、新しい節合関係、代表関係、そして敵対関係を紡ぎだすものであり、それはわれわれ不審者のあいだでの新しい連帯の可能性なのである。

終章では、ラディカルデモクラシー論の最後のアポリアについて考察する。つまりラクラウ自身が体験したペロン主義、あるいはホールが分析したサッチャリズムがそうであったように、非-民主主義的な仕方でのヘゲモニー編成への可能性が多分に含まれているとすれば、ヘゲモニーとそれが説く民主主義社会のあいだには明らかな断絶がある、ということである。そこでヘゲモニー論とデモクラシー論を架橋するために焦点を当てたのが「戦略」という概念である。戦略はラクラウにおいても十分に深められていない概念であり、ここではクラウゼヴィッツに依拠しながら、戦略という概念をヘゲモニー空間のなかに、なんとか進むべき道を指し示すものとして提示した。